

スイス留学

—第二の故郷—

Study in Switzerland:

My Second Home Country

共立女子大学卒 加藤 綾佳

KATO Ayaka

(Kyoritsu Women's University graduate)

キーワード：スイス、フランス語、海外留学

1. はじめに

私は2013年7月から2014年6月まで、スイスのジュネーヴ大学に交換留学をしました。日本人にとってスイスという国は「永世中立」や「アルプスの少女ハイジ」といった平和で穏やかなイメージがあると思います。実際、治安も良くそのイメージは間違えていないと思います。

しかしスイスが4つの言語を公用語としている多言語国家であることを知っている人は多くないのではないのでしょうか。スイスにおけるそれぞれの言語話者の割合は約64%がドイツ語話者、20%がフランス語話者、6%がイタリア語話者、0.5%がロマンシュ語話者で、10%がその他の言語です。日本の九州と同じくらいの面積で、地理的には北西にフランス、北東にドイツ、東にリヒテンシュタインとオーストリア、南にイタリアとヨーロッパのほぼ中心に位置しています。内陸国のため湖はありますが、海はありません。

スイスがなぜこのような多言語国家になったかはここでは割愛しますが、このような状況からスイスのパスポートしか持っていないという人や先祖を辿ってみてもスイス人しか一族にいないという人は珍しいかもしれません。現在、非スイス人の国内を占める割合は約2割です。

よく聞くスイスの街の名前は、経済の中心地チューリッヒや、国連や赤十字などの国際機関も多いジュネーヴ、オリンピック委員会の拠点であるローザンヌ、自然豊かな山岳地グリンデルワルトが挙げられます。首都はベルンというドイツ語圏の街です。私が留学していたジュネーヴはスイス西部に位置する街で、フランスへは1時間もかからずに行くことができます。

このように言語的、地理的な側面から日本とは正反対の国スイスに留学した私が経験したことや感じたことの一部を今回は紹介させていただきます。

2. 留学まで

幼い頃からヨーロッパの文化に憧れを抱いて育った私は、大学に入ってから迷わずにフランス語を第二外国語として履修することを決めました。ドイツ語やスペイン語も選択できましたが、フランス語を選んだ理由はやはり「フランス＝洗練、優雅」といったイメージがあったからだと思います。

ですが、第一外国語は英語のまま、授業の割合は英語のほうを多く選択していました。フランス文化の他に、イギリス文化にも興味があったので、留学先も当時はイギリスが第一希望でした。中高で身につけた英語力を伸ばしたいと考えていました。また、短期ではなく長期で現地生活を経験したいという思いから1年以上の留学を希望していました。

大学入学当時から学内外の留学システムを検討し、自分の希望や語学力、経済的な状況を考慮した後、留学先候補としてあがってきたのが交換留学可能なスイスでした。私の大学ではフランス語圏の交換留学先としてスイスの他にフランスのパリもありましたが、スイスであれば英語も上達できるだろうと思い、スイスに決めました。英語圏のイギリスからフランス語圏のスイスへ留学するという計画の変更は当時を振り返ってみても思い切った決断だったと思いますが、この選択は間違えていませんでした。

そしてその決断をしてからはスイスという国について勉強をしました。多様な公用語を持つこととなった歴史や現在の言語政策、移民問題が特に私の興味を引き、ちょうどこの頃に卒業論文「スイス連邦の四言語主義の過去と現在」というテーマが曖昧にも決まりつつありました。そしてフランス語だけでなく、スイスで最も話されているドイツ語の学習を始め、その仲介となる英語の学習にもさらに力を入れました。

3. 語学力向上のために

スイスへの留学を決める前の私にとって、フランス語はあくまで大学の第二外国語に過ぎませんでしたが、もともと語学を勉強することが好きだったため、授業にも積極的に参加し、自主的にフランス語検定を受験していました。大学1年生の頃、フランス人の先生から会話や発音、日本人の先生から文法をバランス良く学べたことで基礎をしっかりと定着させることができました。大学2年生では1年生で身につけたフランス語を活用して精読の授業がメインとなりました。実際にジュネーヴ大学での授業でも文献を読む頻度は高いので、日本での授業でその基盤が出来たと思います。

学外では日仏学院の大学生向けの夏期講習に1度だけ参加しました。フランス語という共通点を通して学年や専攻の異なる人たちと勉強できたのは貴重な体験でした。またこの夏期講習は後述するジュネーヴ大学での夏期講習に似ていたので、そのような意味でも参加して良かったと思います。

交換留学に応募した大学3年生当時はフランス語検定準2級までしか取得していませんでしたが、学内選考の基準であったフランス語検定2級に合格するために朝から夜まで図書館で勉強していました。常に明確な目標があったため不思議と苦にはなりませんでした。そして無事フランス語検定2級と学内選考にも無事合格し、スイス留学への道は開かれました。

この頃に試行錯誤して習得した自分なりの言語学習の方法は今でも変わっていません。単語や文章をひたすら声に出しながら書くという方法です。特に変わったものではありませんが、私には一番合っていると思います。また、私の場合は英語の単語力や文法を通してフランス語を理解することが多く、特に単語を覚える際には英語の知識が役に立ちました。これはヨーロッパの言語に多く共通して言えることだと思います。

この時期に身につけたフランス語の力は実際にスイスに行ってからすぐに実感できました。もちろんフランス語が伝わらず悔しい思いもした時もありましたが、日本での努力が裏付けとしてあったのでその悔しさもいいバネとなりました。

4. 出発まで

スイスへの留学が決まってから、ジュネーヴ大学へ提出する書類、滞在許可書、保険関係、学生寮の手続きなど、とても忙しくしていたことを思い出します。しかしありがたいことに大学の先生や職員の方に手伝っていただいたおかげで、すべて万全の状態ですイスに出発することができました。

私が滞在していたのは水道費、光熱費など込みで月々約600CHF（約75,000円、2015年9月現在）ほどで、キッチンやシャワーが共有の学生寮でした。物価の高いジュネーヴですが、この家賃は安いと思いますし、大学からも近いためとても生活しやすい環境でした。

滞在許可書や保険の具体的な手続きはスイスに到着してからでした。ジュネーヴ大学では留学生向けのガイダンスがあり、その際に個別相談を含め、すべて説明があったので私も特に困ることはなく終えることができました。ですが、スイスの場合、州によって行政システムが異なるので事前にたくさん情報を集めることは大切だと思います。

私はこの留学の際、海外に行くこと自体が初めてで、さらに一人暮らしをするのも初めてだったので不安がなかったといえば嘘になりますが、それよりもなぜだか期待のほうが大きかったことを覚えています。

5. 夏季語学研修

ジュネーヴ大学では毎年夏に Cours d'été というフランス語の語学研修があります。この研修は3つの期間にわたって行なわれ、私は7月後半の第2セッションと8月前半の第3セッションに参加しました。授業は月曜から金曜まで行なわれます。午前はレベル別に分けられたクラスで文法や会話など全般的な内容を学びます。レベルにもよりますが、平均10人程度のクラスです。午後は選択授業で発音やシャンソン、スイスの歴史など個人の関心に応じた授業が開講されます。生徒は私のような交換留学生もいましたが、大半は現地に住む外国人や休暇でスイスを訪れている外国人学生が多かったように感じます。

私は第2セッションではA2というクラス、第3セッションではB2というクラスで授業を受けました。A2クラスではゲームやアクティビティを使用した楽しいレッスンが行われましたが、B2クラスでは一転してディスカッションやプレゼンテーションが多く、ついていくのがとても大変でした。クラスメイトはスペイン語やイタリア語を母語とする人が多く、語彙力やスピーキングでは敵わないと思いましたが、文法や文章の正確さにおいて、私は負けていなかったと思います。夏季研修では今でも交流のある友達や先生に出会うことができ、ホームシックにもならずとても充実した1カ月半でした。スイス生活の順調な幕開けでした。

夏季研修ではジュネーヴや近郊の街を探索するツアーも準備されているので、観光も同時に楽しむことができます。私はグリユイエールという街を訪れるバスツアーに参加しました。日本人の多くがイメージするスイスらしい街並みがとても可愛らしく、自然豊かな街でした。

夏季研修が終わり、9月から本格的に大学での授業が始まるまでの間、スイスのイタリア語圏のティチーノやドイツ語圏を旅行しました。同じ国でも話されている言語が違うだけで、街の印象や食べ物などはこんなにも違うのかと驚いた記憶があります。さらなるスイスの魅力に気づいた瞬間でした。

6. 大学での授業

夏季研修が終わり、いよいよ9月から大学での授業が始まりました。私がジュネーヴ大学で主に所属していたのが ELCF (Ecole de la langue et la civilisation françaises) というクラスです。文学部の一部であるこのクラスは、主にジュネーヴ大学に次年度入学する外国人向けのフランス語の準備クラスです。あたりまえですが、日本だけでなく他の国からの交換留学生も所属していました。語学力を向上させるためにはこのクラスが一番効果的だと思います。

ELCF の授業の構成は「スピーキング (Oral)」、「ライティング (Ecrit)」、「発音 (Phonétique)」、「オプション」の4つです。私はスピーキングのクラスは取っていませんでしたが、原則ではすべての授業を履修することが単位認定には必要となってきます。スピーキングクラスの代わりに私が行っていたのは Language exchange と呼ばれるタンデムという言語交換のシステムです。スイス人学生

の日本語学習を手助けする代わりに、私のフランス語学習を手伝ってもらおうというのですが、わたしは様々なパートナーとほぼ毎日タンデムをすることでフランス語を話す力を向上させました。ジュネーヴ大学には日本学科があり、日本語を勉強している学生も多いので、日本人がタンデムのパートナーを探すのは容易でした。

私が履修していた授業の中ではライティングの難易度が高かったと思います。秋学期は文法の学習が多くありましたが、春学期はエッセイや論文を書くことが多かったです。文章内で自分の主張を発展させる技術は日本語でもあまり馴染みがなかったのでとても苦労しました。

発音のクラスはレベル別に分かれていて映画のワンシーンを再現しながら正しい発音を学ぶといったものでした。オプションのクラスは3つのクラスから秋学期と春学期ごとに一つを選びます。シャanson、ライティング、プレゼンテーションのクラスがあったと思います。私が秋学期に選んだのがプレゼンテーションのクラスで、自分の国について発表をするといった自由な内容でした。春学期はインターンの関係で履修しませんでした。どのクラスでも自由に意見を言い合ったり、クラスメイトと協力して行う内容だったのでとてもやりがいがありました。

私は ELCF の他に日本史の授業や歴史学科のスイス史の授業にも参加していました。どちらも正規の学生を対象としているため、語学の面だけでなく知識の面でも難しいと感じることが多かったです。しかし卒業論文でスイス史をテーマにすることは既に決めていたので、この授業は必須であると感じ毎回予習をしてから参加していました。

またジュネーヴ大学だけでなく、スイスのいくつかの大学では専攻によっては一部、英語でも授業が履修でき、学位の取得ができるので興味があれば調べてみるといいかもしれません。

7. スイスを選んで良かったこと

スイスを留学先として選んで良かったことは数え切れないほどあります。特に日本人にとって暮らしやすい国であるということです。スリなどもいますし、夜は通らないほうがいい場所もいくつかはありますが、隣国のフランスに比べると治安はずっと良いです。ジュネーヴはフランスに面していますが、スイスの中心部は特に治安が良い印象です。物価が高いとよく言われますが、その点については認めざるを得ません。ですがお弁当を持参し、自炊をすればさほど食費はかからないと思います。ジュネーヴであればフランスに買い物に行くのも手軽です。

交通費は日本よりも安い印象です。ジュネーヴには空港があり、ヨーロッパ各国へ安価な空路で行くことができます。私はスペインやドイツ、フランスなどを旅行しましたが、スイス以外のこれらの国の文化に手軽に触れることができたのは大きな収穫となりました。私が滞在していた時には大きな交通ストライキもなく、日常的に電車やバスが遅延することはありませんでした。

気候について、スイスと聞くと寒いイメージがありますが、実際は私がいた時のジュネーヴはさほど雪も降らず寒くなかった気がします。夏は暑かったですが、湿度が低いので過ごしやすかったです。

また個人的な経験からスイスを選んで良かった点は、国連でインターンができたことです。ジュネーヴには国連の欧州本部があり、私は日本政府代表部の一員として人権理事会の会議の幾つかに参加させていただきました。各国の代表が一つの会議場に集まる光景はまさに「小さな世界」でした。国際関係学や国際法は私の専攻ではありませんが、それでもインターンを通して自分なりに向かい合っ
て考えたい問題があったので、この機会はまたとない絶好のチャンスでした。国連では観光客向けにガイドツアーも実施されているので、国際関係などを学ぶ人には最適だと思います。

そして様々な国の人々が生活しているためスイス人はとても親切で、困っていることがあるとすぐに助けてくれます。ジュネーヴではお年寄りでも英語で話してくれたり、ドイツ語圏やイタリア語圏の街でもフランス語で親切に対応してくれました。

8. おわりに

今日の日本の学生は留学することに消極的である、という話を耳にしたことがあります。確かに経済的にも負担はありますし、就職活動が遅れたりすることも事実かもしれません。語学の勉強なら日本でもできるというのも確かです。よって海外留学は、海外での学業や生活に関心がない人には別に無理強いするものでもないと思います。

しかし何かのご縁で私のこのレポートを読んでもらっている方に最後にお伝えしたいことがあります。それは海外に出て、母国ではないどこか異国を懐かしく、まるで第二の祖国のように思える経験をすることは素晴らしいことだと思うのです。その気持ちはたとえ旅行でも3カ月の滞在でも1年間の滞在でも見つけることができます。私がスイスを懐かしく感じる瞬間は、肌で感じる気温や天気、現地で初めて味わった食べ物など、その瞬間の五感が帰国して薄れてしまっても、ふとした瞬間に蘇ってくる時です。そして再びスイスに行くことがあれば、その感覚は瞬時に鮮やかにうるおいを取り戻すことでしょう。